

日本古代における都市形成と国家

Urban Formation and Nation in Ancient Japan

浅野 充

はじめに

①日本古代都市論研究の理論的検討と視点

②中国・日本の都市形成と国家

おわりに

【論文要旨】

日本原始・古代における都市研究は多くの成果を生み出しつつあるが、都市的な場と農村的な場との対比の中から、当該時代の社会・国家を考える論理研究はまだ少ない。これまで、理論的には、東アジア古代における都市の研究は、マルクスの『資本主義的生産に先行する諸形態』における記述から、その存在を否定する方向でなされてきた。しかし、前稿でも明らかにしたように、マルクスのアジアの都市に関する記述はアジア社会認識のために理論的になされたものであり、アジア古代における都市のあり方の前提とするべきではないといえる。また、最近の日本古代都市研究の整理の検討を通じても、都市形成の持つ重要性はまだ大きいといえる。そこで、本稿では日本の古代都市を考えていくためには、なぜそのような都市が作られなければならなかったかを社会・国家の中で捉える視角を堅持しつつ、さらに民衆にとっての都市の持つ意味にまで視角を広げることとした。具体的には、日本と中国の都城の内外区分を羅城と行政区画という側面から考察する。まず、中国の都城は行政区画上は独立しておらず、羅城を以て内外区分をしていたことを確認した。それに対して、日本の古代宮都には羅城はごく一部にしか存在せず、行政区画を独立させることで内外区分をしていたことを確認した。しかし、日本においてもそのような形を取るのには宮都だけでなく、その他の地域では中国的形態を取っていた。そのような日本の古代宮都の内外区分の特殊性を、一般京戸確保のためと捉え、次いでそのことの持つ意味を検討した。つまり、日本の古代宮都は唐長安城の中華の場を作る必要から民衆まで確保しなければならなかったこと、また幻想としての首長制的共同体に日本全体の民衆を取り込むため宮都にも民衆が必要であったことを指摘した。前者の都市と農村との異質性、後者の都市と農村との同質性という二つの性格に、日本古代宮都の都市としての意味を見出だすことが出来ると捉えた。